



典礼委員会担当司祭 菅原友明

今月のポイント

「世の罪を取り除く主よ、
いつくしみをわたしたちに」

「栄光の賛歌」も口語体に

今回の改訂では、ミサの賛歌に残存していた文語体が、すべて口語体に改められます。「天のいと高きところには神に栄光：」と高らかな調子で始められていた「栄光の賛歌」も、「天には神に栄光：」とローマ典礼伝統の簡潔美を尊重した控えめな口語訳文になります(※1)。抑制された質素で簡略な表現は、感情や感覚よりも一段と深い静寂な領域での神への賛美を目覚めさせ、淡々と簡潔に進行していくのが本領のローマ典礼の流れと

も調和します(※2)。なお、歌唱する場合には、引き続き従来の文語体聖歌を歌うことができます。

ところで、栄光とは何でしょう？ 私達はどのような時に栄光を讃えるのでしょうか？ オリンピックのメダリストに栄光が帰せられるのは、そこに至るまでの並外れた努力や忍耐という犠牲に対して、人々が惜しみない賛嘆をささげるからです。まして戦争や災害や事故などの際に、自分の命を犠牲にして他者を救ったような人への称賛は、私達の心の底から溢れ出してきて止みません。自分に身近な出来事ではなかったとしても、それでもなおおこみ上げてくる、犠牲に対する「ごめんなさい」「ありがとう」という深遠な心のうずきを私達は無視できないのです。つきつめると栄光を讃えるということは、犠牲に対する切なる痛悔と感謝にほかなりません。ミサの始まりに「栄光の賛歌」をささげる真価もそこにあります。

実際、「ローマ・ミサ典礼書の総則」には「栄光の賛歌は、きわめて古いとうとぶべき賛歌であって、聖霊のうちに集う教会は、この歌をもって神なる父と小羊をたたえ、祈るのである」(※3)とうたわれています。父なる神、聖霊とと

もに讃えられているのは、何よりもまず小羊、つまり生け贖(犠牲)としてのキリストなのです。「栄光の賛歌(グロリア)」の「神なる主、神の小羊、父のみ子よ、世の罪を取り除く主よ、いつくしみをわたしたちに」は、ミサ後半の山場で捧げる「平和の賛歌(アニヌス・デイ)」の「世の罪を取り除く神の小羊、いつくしみをわたしたちに」と、重なり合い、響き合い、深め合います。

「栄光の賛歌」を歌う私達は、ミサが犠牲祭儀であること、生け贖の小羊キリストが私達の罪を取り除いたことを思い起こし、私達のために命を犠牲にしてくださった主に対する、心からの「ごめんなさい」「ありがとう」をおささげし、三位一体の神に栄光を帰すのです。

※1 ラテン語では「グロリア・イン・エクチェルシス・デオ：」で、「栄光の賛歌」は広く「グロリア」と呼ばれており、今回の改訂で日本語表題も「栄光の賛歌(グロリア)」と表記されるようになります。

※2 「儀式は簡素の美を備え、簡単明瞭であり、不必要な重複を避け、信者の理解に順応し、一般に多くの説明を必要としないものでなければならぬ」(第2バチカン公会議『典礼憲章』34)

※3 『ローマ・ミサ典礼書の総則(暫定版)』53(旧版31) 傍点は筆者。